

## 故武生先生の思い出

廣瀬 杲

十一月十四日、正親先生が地方の講演のお歸りに一寸京都へ立寄られた。たまたま御一緒だった二村先生に、私も加えて頂いて秋も深まつた東山邊りを散歩し乍ら、久し振りで種々のお話も承つたが、その時、妙に武生先生の近況から在學當時の御様子、更には學生時代の事にまで遡つて、暫く先生のお噂まで時を過した。先生の御逝去を知つたのはその翌々日だっただけに、何か虫の報せと云つたような古風なことが、頻りと思われてならなかつたが、後から考えてみれば、殊に武生先生とはお親しかつたお二人の先生が久し振りにお會いになつたのだから、先生のお噂さの出るのはむしろ當然だったのである。その後二村先生にお會いしたら「武生君ももう一度酒でも一緒に呑んだら、元氣になつたような氣がしてならないのだが」と洩しておられたのをお聞きして、私はふと武生先生の御様子と一緒に、以前教學部におられた元氣もものHさんを思い出した。Hさんは武生先生とは随分親しくしておられたようで、この人も酒は強い方だつたらしく、時々先生のお相手をしては、最後にはお宅まで先生をお送りするのが役目だつたらしい。ところが先生のお部屋へ入るとウイスキーの壺が机の片隅か何處かに置いてあり、それを見つけると先生はきつと「また誰やらこんな

もの持つて来よつて」と、さも御存知なかつたと云つた素振りで、改めてグラスを用意されるのだが、その照れ隠しをする先生の嘘が實に下手なのが面白い、と云つて時々話していた。そのHさんも既に故人になつてしまわれたが、それやこれや思い合している、何だか今頃何處かでHさんを相手にして、例の瘦せたお體を前屈みにし乍ら、盃を重ねて笑談して居られるような氣がしてならないのである。私は特別に先生とお親しくして頂いたと云うこともなく、また恐らく先生も私を特別どうともお考えにはならなかつたらうと思う。そんな私が先生の追悼文を書くのだから、もつと眞面目に何かを書くべきで、少くとも酒の話などは謹しむべきだったかも知れない。だが私が先生を忘れられないのは、その素純なお人柄の故なのである。素純のままに激しい情熱を内に秘められた御性格が、どんな些細な事をも決して良い加減にすまずことを許さなかつたのであり、それが先生の肉體を亡したのではないかとすら思われる。

先生を始めて大學の教壇にお迎えしたのは、確か私の學部三回の時であり、その時は「淨土の菩提心」と云う講義を聞かして頂いた。これには異状な迄の情熱を傾けておられたが、それはやがて「造意の緣由を課題とする愚禿鈔の研究」と題して、明恵の『輪・記』に對するものとしての『愚禿鈔』の造意を跡づける勞作となつて、研究年報に發表されたが、その後現在シカゴにいる齋藤敏明君が發起して、先生を圍んで『輪・記』の輪讀會を持つこととなつた。結局この會は齋藤君と私の二人だけが残る結果になつてしまつたが、こんな微々たる學生の會の爲にも、先生は自らテキストの原紙を切つてプリントされる迄

に努めて下さった。もう一つ先生について忘れられぬ事がある。それは私が研究室助手をしていた時、學會會報である『聞思』の複刊が企圖されたのであるが、種々な事情も重なり一時は断念せねばならぬかとさえ思われた程であつた。丁度その頃研究室主任をしておられた先生は、他にも種々お役目を持つておられたようだったが、私を連れて部長室へ行き、訥々と乍らも『聞思』を是非出したい旨を語つて補助金を出してくれようお願ひして下さい。出版の實際に當り困惑し切つていた當時の自分を思い出す時、その時の先生の御様子を思うと眼頭の熱くなるのをおぼえる。この先生のお力が今日まで『聞思』發刊を続ける礎石となつておることを思うのである。

決して深いお附合いを頂いたわけでもなかつた私にでも、種々思い出せば限りがない。しかし、それを貰いて思われることは、ただ會ひ難い先生の御人格である。所謂要領よく切り抜けて行くと言ふ世智の無かつた先生、いや、むしろその純なる御心情がそうした世智を自らに許せなかつた先生、その深い印象が私をしてこんな一文を草して、先生の御逝去を傷ましめずにはおかないものなのである。眞宗の學は人である。しかし人に會ひ得ることは生涯において決して多くはない。先生が今なお御元氣で御活躍頂けたならば、後輩の私達は勿論、新たに本學に學ぶ學生諸君もどんなに大きな人格的教化を受けることが出來たことであらうか。それを思うと諦め切れない氣持で一杯である。そうした思いのままに分をも顧みず追悼の一文を綴らして頂いた次第である。

## 故武生讓教授略年譜

明治三二(1) <small>年 歲</small>	一〇月一七日	大阪府豊屋川市萬福寺に生る。	
大正一〇(22)	一〇月 一日	福井縣敦賀市西雲寺に入寺。(寺籍簿に依る)	
一五(27)	三月二一日	大谷大學文學部卒業。	
	四月一〇日	大谷大學研究科入學。	
	六月 一日	大谷大學研究室助手。	
昭和 二(28)	四月 五日	大谷中學校教諭(七年三月迄)。	
	四(30)	四月三〇日	大谷大學研究科終了。
	五(32)	四月 一日	京都大谷專修學院教授。
	一六(42)	六月 一日	教化研究院研究員(一九年迄)。
	二二(48)	六月二七日	湖北大谷學場長。
	二六(52)	四月 一日	大谷大學講師。
	二七(53)	四月 一日	大谷大學短期大學部教授。
	二九(55)	九月 一日	大谷大學教授。
	三一(57)	九月二一日	學生部長を兼任(三三年九月迄)。
	三三(59)	四月 一日	大谷大學御遠忌記念事業委員。
	三六(62)	三月三〇日	依願退職。
	一一月一六日		敦賀市西雲寺にて逝去。